

第14回 安佐動物公園・植物公園・こんちゅう館 研究活動発表会のお知らせ

(公財)広島市みどり生きもの協会の安佐動物公園、植物公園、森林公園こんちゅう館は、日ごろの調査研究活動を広く市民の皆様にご覧いただくため、合同で発表会を開催します。

最新の情報を担当者から直接お伝えしますので、ぜひお聞きください。

- 1 日 時 平成30年2月8日(木) 14:00~16:00
- 2 会 場 広島市役所2階講堂(広島市中区国泰寺町一丁目6番34号)
※駐車場に限りがあります。公共交通機関を利用してお越しください。
- 3 申 込 当日、会場にて受け付け
- 4 発表内容

(1) “地中型巣箱”により成功したツクシガモの自然繁殖

発表者：広島市安佐動物公園 飼育・展示課 技師 安西 航

ツクシガモ (*Tadorna tadorna*) は白黒の身体に栗色の帯が入り、真っ赤な嘴をもつ綺麗なカモの一種です。日本には冬鳥として九州北部に少数が飛来します。

広島市安佐動物公園では1983年からツクシガモの飼育を始めて以降、ほぼ毎年繁殖に成功していましたが、しかし個体の高齢化もあってか1999年を最後に繁殖がとまってしまい、個体数が減っていました。2011年に繁殖を期待して新たなペアを導入したものの、それらの個体は断翼(飛んで逃げないように、翼の一部を切除すること)されていたこともあり、なかなか繁殖行動がみられませんでした。

野生のツクシガモの繁殖行動を調べたところ、縄張り性がとても強いことと、ウサギの巣穴に産卵することがあるとわかりました。そこで、同居させるペアを1組に減らし、さらに木製の巣箱を地面に埋めた“地中型巣箱”を新しく設置してみました。その結果、18年ぶりにツクシガモの自然繁殖がみられ、3羽の雛が元気に成育しました。

動物たちが繁殖するには、本来の生息環境を飼育下で再現することと、そのための調査研究が重要です。今回の発表ではそれに成功した一例として、飼育現場での工夫と、ツクシガモの子育ての様子をご紹介します。



“地中型巣箱”に入る雌と様子を見守る雄



雌親と生後1週間の雛

(2) こんちゅう館におけるチョウの飼育展示について

発表者：広島市森林公園こんちゅう館 技師 藤井 智展

こんちゅう館には、一年中、約 10 種 500 頭のチョウを間近に見て、ふれあうことのできる「パピヨンドーム」という温室があるのをご存じですか？美しいチョウたちが飛びまわり、来館者にとっても人気のある、当館のメイン施設です。

このような施設は、全国的にも当館を含めて 9 箇所しかありません。広い空間を自由に飛びまわり、花の蜜を吸う姿など、チョウの自然な生態や行動を観察することができる希少な施設なのです。

ところが、ガラス温室という人工的な限られた空間の中で、一年を通してチョウが可憐に美しく飛ぶ姿を見ていただくためには、温室の形状や設備、チョウの種類を選定や飼育方法、えさ（食草）の栽培や温室内の植栽について、様々な工夫が必要でした。

様々なノウハウの中から今回は、① チョウがくらしやすく、来館者がチョウを観察しやすいパピヨンドーム内の環境づくり、② 一年中、変わらずチョウを飛ばし続けるための飼育方法、③ 食草や植栽の管理などについて、当館が設立より約 30 年間で蓄積してきた経験や実績から作り上げてきたものを詳しく紹介したいと思います。



パピヨンドーム



オオゴマダラ

(3) 日本最大となるオーストラリア・バオバブの大温室導入

発表者：広島市植物公園 栽培・展示課 第一栽培・展示 技師 堀川大輔

バオバブ (baobab) はアフリカ、マダガスカル、オーストラリアにのみ自生している樹木であり、約 10 種が存在しています。その性質や姿形は非常に特徴的であり、自生地では現地の人々に幅広く愛され、様々な形で日々の生活に利用されています。

本園の大温室は、昨年度から老朽化・耐震化に伴う大規模改修を行っており、この度、リニューアル後のシンボルツリーとして、直径約 2m、高さ 5m 以上の巨大なオーストラリア・バオバブ (*Adansonia gregorii*) を導入することになりました。国内の植物園の中で大きなオーストラリア・バオバブを所有・展示しているところは数少なく、本園に導入されるバオバブはその中でも最も大きいサイズになります。導入には多くの困難が予想されましたが、念には念を入れた準備・作業のおかげで、大きなトラブルもなく無事に大温室に定植することができました。

本発表では、バオバブの導入から定植まで経緯や、現在の様子についてご紹介します。



自生地での導入したバオバブ



現地での掘上作業



大温室での定植作業